

有権者の党首態度に関する計量分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政治経済研究所 公開日: 2009-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井田, 正道 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1804

有権者の党首態度に関する計量分析

井 田 正 道

1. はじめに

わが国では、投票行動を規定する態度要因として、政党支持態度、争点態度、候補者志向、業績評価が重視されてきた。これらの政治的態度が注目を集めた理由の一つには、わが国の投票行動研究が同分野での先進国であるアメリカの研究成果に影響を受けてきたことが挙げられる。しかし、アメリカの主要な投票行動理論は、わが国では存在しない大統領選挙を題材として構築されたものである。また、アメリカの政党はわが国のそれとは異なって党首が不在であるという点も両国間の異質性として指摘できる。

わが国の国会議員選挙では、選挙運動に関して党首がテレビ画面に登場することが多く、党首イメージやそれに基づく好感度が投票行動に影響を及ぼす潜在的可能性が存在する。しかし、わが国の党首の多くはトップ・ダウン型の「強いリーダーシップ」を発揮するというよりも、党内諸勢力の調整能力に長けた「調整型」リーダーシップを発揮する傾向が強かったこともあって、党首イメージや好感度は投票行動の決定因としては重視されてこなかった⁽¹⁾。

しかし、今日のように、無党派層が増大し、その無党派層が選挙の帰趨を決するような時代においては、マス・メディアを通して形成される党首イメージや党首好感度が選挙結果に影響を及ぼす可能性は高まっている。したがっ

て、党首態度の研究意義もまた高まっているといえよう。

ここでは、1998年7月に行われた第18回参議院通常選挙の参院選直後に実施した世論調査データの分析を通して、有権者の党首好感度についていくつかの経験的仮説を提示する。党首好感度を中心に据えたのは、それが政治的リーダーに対する大衆の感情レベルでの反応を分析するための重要な指標となっているからである。

本稿における分析の焦点を以下に示す。

- ① 首相好感度と内閣支持との関係
- ② 党首好感度と投票行動との関係
- ③ 党首好感度と政治・生活意識との関係
- ④ 党首好感度の因子構造
- ⑤ 党首好感度と党首イメージとの関係

2. 調査の概要

ここで用いるデータは、1998年度常磐大学人間科学部組織管理学科に設置されている組織政策実習において実施した世論調査データである。調査の概要は次の通りである。

調査目的：有権者の政治意識と投票行動の分析

調査時期：1998年7月13～16日。

標本抽出方法：クォータ法（年齢別・性別に割り当て）

調査方法：直接面接法と留置法の併用

有効回収数：487名

標本抽出方法に関しては、一般に我が国で望ましいとされている無作為抽出法を採用していないため、結果の安易な一般化は慎まなければならない。しかしながら、同様の方法で実施した過去4年の調査結果を分析した感想と

有権者の党首態度に関する計量分析

しては、調査結果は時々の政治社会状況をよく反映しており、国民の世論動向を知る上で何らかの参考になるデータになっていると考える。

回答者の構成を以下に示す。

性別：男 49.9%，女 49.9%，NA 0.2%

年齢：20～29 歳 17.0%，30～39 歳 13.8%，40～49 歳 17.7%，50～59 歳 18.3%，60～69 歳 15.8%，70 歳以上 17.2%，NA 0.2%

職業：農林漁業 7.0%，商工自営業 5.5%，自由業 3.1%，管理職 7.8%，専門・技術職 8.0%，販売・保安・サービス 12.1%，運輸・通信・生産工程従事者 4.1%，無職・年金生活者 19.3%，主婦（パートを含む）20.5%，学生 9.9%，NA 2.7%

学歴：中学（旧小・高小）20.5%，高校（旧中）45.8%，大学・短大（旧高専）31.2%，NA 2.5%

生活程度：上 2.9%，中の上 15.6%，中の中 58.7%，中の下 17.5%，下 3.7%，NA 1.6%

居住年数：1 年未満 1.8%，1 年以上 3 年未満 7.6%，3 年以上 10 年未満 6.8%，10 年以上（生まれてからずっとは除く）46.0%，生まれてからずっと 37.0%，NA 0.8%

居住地：茨城県（市部）60.0%，茨城県（郡部）32.6%，茨城県外 6.6%，NA 0.8%

なお、回答者集団における政党支持率の分布は、自民党 26.7%，民主党 24.2%，公明 2.1%，社民党 2.5%，共産党 3.1%，自由党 3.7%，さきがけ 0.6%，新社会党 0.8%，支持政党なし 35.7% だった⁽²⁾。ちなみに、本調査の約 1 週間後である 98 年 7 月 23 日に実施された読売新聞社の全国世論調査における政党支持率は自民党 20.7%，民主党 18.4%，公明 4.0%，社民党 3.6%，共産党 6.5%，自由党 2.9%，さきがけ 0.2%，支持政党なし 41.7% だった。両

調査の各党支持率には幾分の差が認められるものの、自民党と民主党の支持率が伯仲状態にあることや、支持なし層の比率など基本的には類似している。ただ、これらの調査における民主党支持率の高さについては、参議院選挙で民主党が予想以上の議席を獲得したことに影響されて選挙直後に民主党支持者となった者が多数存在し、その結果支持率が跳ね上がったものと考えられる⁽³⁾。

3. 調査結果の分析

3-1 党首好感度の分布

本調査においては、98年参院選における主要8政党の党首について好感度とイメージに関する質問項目を設定した。主要8政党の党首とは、橋本龍太郎（自民）、菅直人（民主）、浜四津敏子（公明）、土井たか子（社民）、不破哲三（共産）、小沢一郎（自由）、武村正義（さきがけ）、矢田部理（新社会）である。ここでは同選挙で議席獲得がならなかったさきがけの武村と新社会党の矢田部を除き、主要6政党の党首に関するデータを取り上げる。

党首好感度の分布を図1に、今回調査の平均値と標準偏差および前年調査の平均値を表1に示す⁽⁴⁾。平均値は、「好き」1点、「やや好き」2点、「どちらでもない」3点、「やや嫌い」4点、「嫌い」5点として算出したものである

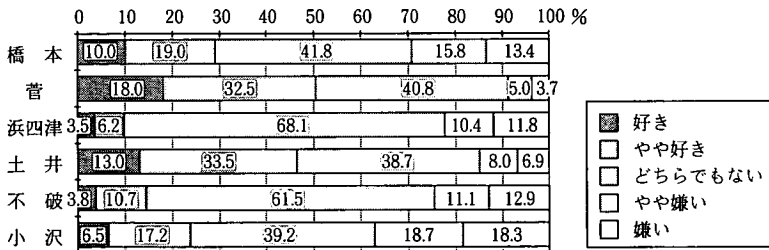


図1 党首好感度の分布

有権者の党首態度に関する計量分析

表1 党首好感度（平均値と標準偏差）

	平均値	標準偏差	97年平均値
橋本	3.04	1.1345	2.83
菅	2.43	0.9640	2.57
浜四津	3.21	0.8587	
土井	2.62	1.0347	2.68
不破	3.19	0.9238	3.31
小沢	3.25	1.1371	3.63

る。すなわち、平均値が低いほど平均的な好感度が高い。以下、各党首の好感度について記述していく。

橋本龍太郎

「好き」と「やや好き」とを合わせて3割弱、「嫌い」と「やや嫌い」を合わせても3割弱と、「どちらでもない」を中心とした正規分布を示している。平均値は3.04で前年よりも好感度が低下した。これは、長びく不況の中で、各種世論調査にみられた橋本内閣支持率の低下に符合して橋本個人の人気も低下していることを表している。標準偏差は1.1345で小沢に次いで高く、橋本に対する好感度の分裂の度合いが比較的高いことがわかる。

菅 直人

「好き」とする者が18%と6党首の中で最も多く、「やや好き」と合わせると好感を抱く者は6党首のなかで唯一5割を超える。また、「やや嫌い」ないしは「嫌い」と回答した者は合わせて1割に満たず、これも菅唯一人である。この調査結果から菅代表の高い人気がかがわれる。

浜四津敏子

好感度の分布からみると浜四津は有権者にとって存在感が薄いようだ。

「どちらでもない」の比率が6党首中で最高の68.1%にのぼり、標準偏差も6党首中最も低い。

土井たか子

1989年の参院選で土井ブームを起こしてから9年間が経つものの、土井人気は依然根強い。好感度は菅に次いで高く、また「どちらでもない」とした者の比率は6党首中最低である。86年の社会党委員長就任以来、政界の主要なポストにあることが多く、高い知名度がうかがわれる。しかし、土井個人に対する人気が社民党への支持につながっていない。反対に言えば、社民党支持層の低さを考えれば土井党首に対する人気は釣り合いの失するほど高いともいえる。

不破哲三

不破哲三は、1970年に共産党書記局長に就任して以来、長年にわたって党の要職にある。したがって知名度も高いと想定されるが、調査結果では「どちらでもない」が6割を超えている。この原因としては、近年の共産党で最も注目度が高いのは不破委員長ではなく、むしろ志位和夫書記局長であることも原因の1つにあるとみられる。

小沢一郎

しばしば「剛腕」といわれる小沢一郎は、平均値で6党首中最も高い値を示しており、したがって6党首の中で好感度が最も低い。しかし、前年11月の調査に比して平均値がマイナス0.38となっており、好感度が上昇している。前回調査の時点では小沢は新進党党首であったが、97年12月の新進党解党の後、小沢は自由党を結成した。小沢は、良くも悪くも存在感のある政治家であるため、有権者による好き嫌いの分裂がはっきりしており、標準

偏差は6党首中最高値を示している。

3-2 首相好感度と内閣支持率

政治意識は認知的側面や感情的側面などからなり、好き・嫌いで測られる感情的側面が認知的側面や行動と強い相関関係がある。例えば政党に対する支持態度は、政党に対する好感度と密接な関係にある。原純輔はSSM調査のデータを分析して、政党好感度と政党支持態度との間に緊密な関係があることを指摘し、①政党支持意識と政党好感度がよく似たものであること、②政党に対する好き嫌いの感情が決してでたらめのものではなく、政党好感度が妥当性をもっていることを指摘している⁶⁾。それでは、通常の世界論調査で最も注目度の高い項目である内閣支持率は首相好感度と強い相関関係が見られるのだろうか。

今回の世論調査を分析した結果、橋本首相(当時)に対する好感度と橋本内閣支持率との間には密接な関係がある。図2に示すように、橋本首相を「嫌い」とした者で内閣を支持する者は皆無であり、「やや嫌い」とした者でも内閣を支持する者はわずか1.4%だった。この結果からすると、「首相個人は嫌いだが、内閣は支持する」という者がほとんど存在していないことがわかる。

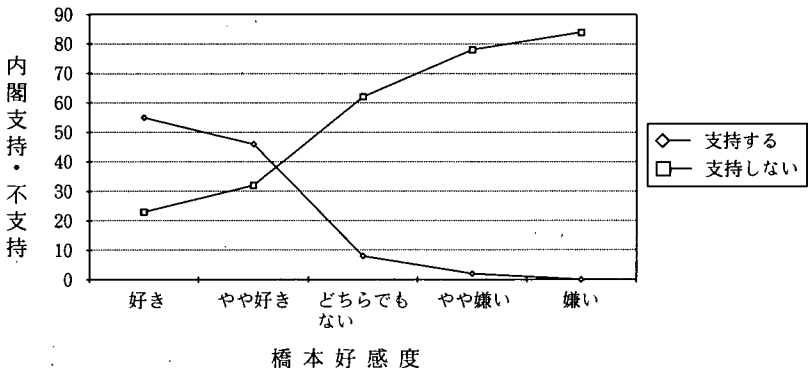


図2 橋本好感度と内閣支持率

反対に「首相は好きだが、内閣は支持しない」という者はある程度存在する。とはいえ、橋本内閣支持者のうちの5人中4人(80.5%)が橋本龍太郎個人に対して「好き」もしくは「やや好き」と回答した者であり、内閣支持率は首相に対する好感によって支えられているといえる。つまり一見非合理的な首相に対する好き嫌い感情も、一見合理的判断にみえる内閣支持・不支持態度を規定しているのである。

従来の知見では、政党支持態度は政治的事象に対して認知スクリーンの機能を果たし、他の政治的態度に対して規定性を有するとされる⁽⁶⁾。したがって、有権者の党首好感度に対しても政党支持態度は規定性を有すると考えられる。けれども反対に、党首態度が政党支持態度を規定する可能性もある。1986年に社会党が土井たか子を委員長とした後に社会党支持率が数ポイント上昇し、いわゆる「土井効果」が見られたことが一例として挙げられよう⁽⁷⁾。

また、さきに首相好感度が内閣支持・不支持の態度と密接な関連性をもつことを指摘したが、その内閣支持率は、政党支持率にも連動する。たとえば、1982年12月から1987年10月まで続いた中曽根内閣時代における月別の内閣支持率と自民党支持率との相関係数を算出したところ0.677となり、正の相関関係が見られた⁽⁸⁾。さきに、橋本好感度と橋本内閣支持率との間に密接な関係があることを示した。これらの結果を総合すると、首相好感度が内閣支持率を規定し、内閣支持率が政党支持率を規定するという関係が成立することになる。

3-3 党首好感度と投票行動

1998年7月に行われた第18回参議院通常選挙は、自民党の予想外の大敗と、民主・共産両党の躍進という結果に終わった。概ね投票日1週間前に行われたマスコミ各社の世論調査に基づく予測では、自民党は参院における単

独過半数の回復は厳しいものの、現有議席の61議席前後を獲得するという線ではば一致していた。ところが、蓋を開けると自民党は44議席という予測をはるかに下回る議席しか獲得できなかった。

一方、野党第一党の民主党は党首の菅直人に対する国民の人気は高いものの、支持率において自民党にはるかに下回る水準がつづいており、いわゆる「菅民格差」なるものが指摘されていた⁹⁾。そのような状況下で民主党に風を吹かせるためには、橋本内閣が選挙直前に失策を犯すか、民主党が菅代表を前面に出した選挙戦を展開することによって浮動票を少しでも多く獲得し、菅民格差を縮めるかの何れかしかなかった。

このうち自民党側の失策らしきこととして挙げられるのは、投票日直前になって当時の橋本首相が恒久減税の導入を主張したことである。それは国民の中に選挙目当てとの印象をもたれ、それが自民党にマイナスに作用した可能性がある。けれども、それだけに自民党大敗の原因を求めることはできないであろう。菅代表の個人的人気を利用した民主党の選挙戦術が、投票決定期の遅い浮動層にアピールした点も見逃せない。そして、その浮動層が投票時間の延長もあって投票に出向き、民主党に票を投じたことが民主党の予想以上の勝利につながったと考えることもできる。

ここでは、党首好感度と投票行動との関係を検討してみる。図3は、各党首に対する好感度別にその党首が率いる政党に投票した比率を示す(棄権者・無回答者を除く)。例えば、橋本—自民とあるのは、橋本龍太郎に対する好感度別に、参院選の比例区で自民党に投票した者の比率を表している。橋本を「好き」と回答した者で自民党に投票した者の比率は、75.8%にもものぼるのに対して、「嫌い」とした者では11.4%にとどまる。他の党首についても、党首好感度は投票行動と密接な関係がある。

しかし、クロス集計でみられる党首好感度と投票行動との関係は政党支持態度など他の変数を媒介としたものであって、いわば「見せかけの相関(疑

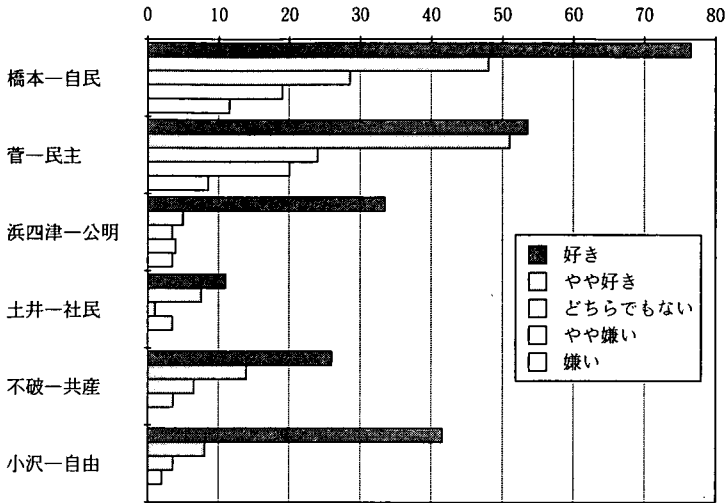


図3 党首好感度と比例区投票

似相関)」の可能性もある。そこで次に、ロジスティック回帰分析により党首好感度の規定力を検討した。まず、従属変数は比例区における自民党への投票とし、独立変数としては生活満足度、政治満足度、暮らし向き（回顧）、暮らし向き（展望）、政党支持態度、保革自己イメージ、橋本政権の経済政策に対する評価、橋本好感度、階層帰属意識を取りあげた。解析の結果、有意水準に達したのは、政党支持態度のみであった。この結果からすると、クロス集計では強い関連性を示した橋本好感度と自民党投票との関係は、政党支持態度に隠されたいわば見せかけの相関にすぎないことになる。

次に、従属変数を民主党投票とし、独立変数の中の党首好感度を橋本好感度から菅好感度に代えて同様の解析を行った。解析の結果、民主党投票に関しても政党支持態度のみが有意水準をクリアした。このように、ここで取りあげた態度変数のうちで投票行動の決定因となっているのは、ほとんど政党支持態度のみであり、党首好感度は投票行動に対する有力な規定要因ではな

有権者の党首態度に関する計量分析

いと結論づけられる。

しかし、政党支持態度と投票行動とは近すぎる変数ではないかという問題が残る。すなわち、政党支持態度で投票行動を説明することは、態度次元と行動次元という次元の相違こそあれ、同義反復（トートロジー）に近いともいえる。とりわけ、比例代表選挙においては、投票者は政党名で投票するため、候補者志向が規定要因からはずれ、選挙区における投票行動以上に政党支持態度の規定力が増すと想定される。したがって、党首好感度は投票行動に直接的影響を及ぼすというよりも、政党支持態度に影響を与え、政党支持態度を経由して投票行動に影響を及ぼすとみなすことも可能である⁽¹⁰⁾。

そこで次に、投票行動ではなく、政党支持態度を従属変数としてロジスティック回帰分析を行い、党首好感度が有力な規定要因となっているのか否かを検討した。解析結果については表2に示す。

まず、自民党支持を従属変数とし、生活満足度、政治満足度、暮らし向き、

表2 自民党支持・民主党支持を従属変数としたロジスティック回帰分析

独立変数	従属変数			
	自民党支持		民主党支持	
	回帰係数	偏相関	回帰係数	偏相関
生活満足	0.0730	0.0000	-0.1254	0.0000
政治満足	0.2978	0.0279	-0.4336*	-0.0754
暮らし向き(回顧)	0.2065	0.0000	-0.4806*	-0.0728
暮らし向き(展望)	0.1079	0.0000	0.2164	0.0000
保革自己イメージ	0.3591**	0.1779	0.0864	0.0000
経済政策評価	0.3928**	0.0966	-0.0310	0.0000
階層帰属意識	-0.1287	0.0000	0.0131	0.0000
橋本好感度	0.7626**	0.2270		
			0.9067**	0.2706
定数	-4.9760		1.0194	
分類の的中率	81.15%		77.05%	
カイ自乗値	126.9 (p<0.01)		61.4 (p<0.01)	
N	487		487	

(注) **はp<0.01, *はp<0.05

今後の暮らし向き、保革自己イメージ、橋本政権の経済政策に対する評価、階層帰属意識、橋本好感度を独立変数としてロジスティック回帰分析を行ったところ、回帰係数・偏相関が最も高いのが橋本好感度であった。その他の独立変数の中で5%有意水準をクリアしたのは、橋本政権の経済政策に対する評価、保革自己イメージの2つである。

民主党支持を従属変数とした場合も、回帰係数・偏相関が最も高いのは菅好感度であった。その他の独立変数の中で有意水準をクリアしたのは政治満足度と暮らし向き（回顧）であった。

このように、自民党支持、民主党支持のいずれにおいても、態度変数の中で党首好感度との関連性が強いことがわかった。この結果から、党首好感度は政党支持に影響を及ぼし、政党支持が投票行動に影響を及ぼすという流れを想定することが可能だが、同時に政党支持態度が党首好感度を規定することも忘れてはならない。

3-4 政治・生活意識との関係

党首好感度は政治意識や生活意識といかなる関係にあるのだろうか。ここでは政治満足度、生活満足度、暮らし向き（展望）、暮らし向き（回顧）、保革自己イメージと党首好感度との関係を検討していく。それらの相関係数を表3に示す。一般に相関係数の絶対値が0.2未満の場合は「ほとんど相関がない」

表3 党首好感度と政治・生活意識

	政治満足	生活満足	今後暮らし	暮らし向き	保守革新
橋本 好感度	0.344**	0.166**	0.231**	0.202**	0.169**
小沢 好感度	0.076	0.088	0.138**	0.113*	0.055
菅 好感度	-0.030	-0.051	-0.008	-0.069	-0.055
土井 好感度	0.056	0.163**	0.110*	0.021	-0.068
浜四津好感度	0.115*	0.030	0.097*	-0.018	-0.017
不破 好感度	0.032	-0.043	0.083	-0.023	-0.085

(注) **は $p < 0.01$, *は $p < 0.05$

有権者の党首態度に関する計量分析

と解釈されるが、表2の大半のセルで絶対値が0.2未満であり、概して相関が低いことがわかる。相関係数が0.2以上を示すのは橋本好感度と政治満足度(0.344)、暮らし向き(0.202)、今後の暮らし向き(0.231)しかない。これら3つの態度は、業績評価(期待)を表すものであり、したがって業績評価と首相好感度とは相関関係がみられる。他方、野党の党首と政治・社会意識との相関係数は概ね低く、なかでも菅好感度と不破好感度は全ての項目の絶対値が0.1にも達していない。つまり、全体として野党党首の好感度はここで取り上げた政治意識や生活意識とは関係が薄いといえる。

さらに注目すべきなのは、保革自己イメージと党首好感度との相関の低さである。5%水準で有意水準に達しているのは橋本のみである。また、明確な右派の立場をとる小沢の相関係数の低さは検討に値する。保革自己イメージと小沢好感度とのクロス集計結果を図4に示す。ここに示されているように、小沢を「好き」あるいは「やや好き」とする者が最も多いのは「やや革新」の層であり、「保守」層の人気は決して高くない。小沢はイデオロギー上は保守であるが同時に右派の立場からの改革派であり、かつ自民党長期支配を終焉させたキーパーソンの1人である。しかしながら、「やや革新」層における小沢への比較的高い好感度は、自由党の支持につながっていない。

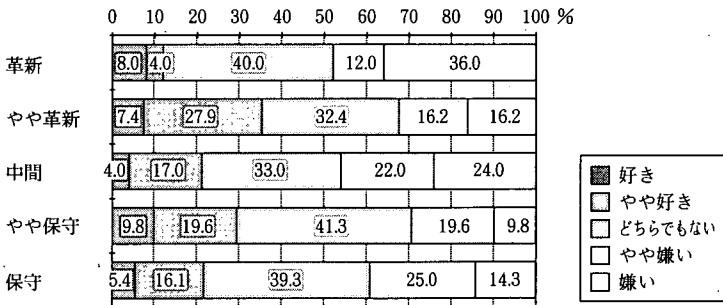


図4 保革自己イメージと小沢好感度

改革自己イメージ別の自由党支持率は、「保守」2.4%、「やや保守」6.5%、「中間」5.7%、「やや革新」2.9%、「革新」0.0%であり、革新層からは支持されていない。

また、政治・社会意識の各項目間にも相関関係が認められる。例えば、政治満足度と生活満足度との相関係数は0.341という値が見られた。そこで、重回帰分析によってここでとりあげた政治・社会意識のうち、いずれの項目が党首好感度を規定しているのかを検討してみた。もとより、政治・社会意識と党首好感度との相関は全体として低いため、重回帰分析結果の R^2 も低く、0.1を超えたのは橋本好感度(0.168)のみであった。そこで、橋本好感度についてのみ取り上げると、有意確率が0.05より小さい意識項目は政治満足度のみで、回帰係数は0.411だった。

3-5 党首好感度の因子構造

ある党首に好感を抱いている者は、他のある党首に対しても同様に好感を抱く傾向があるかもしれないし、逆に嫌悪感を抱く傾向があるかもしれない。この点を党首好感度間の相関係数をみながら検討していきたい。党首好感度間の相関係数を表4に示す。まず、全体としていえることは、負の値を示している箇所がほとんどない。これは、ある党首に好感をもっているとする者は他の党首にも好感をもっていると回答する傾向があることを示す。

表4 各党首好感度の相関係数

	橋本	菅	浜四津	土井	不破	小沢
橋本						
菅		-0.002				
浜四津			0.165**			
土井			0.278**	0.098*		
不破				0.361**	0.058	
小沢				0.260**	0.239**	0.106*
					0.430**	0.111*
					0.318**	0.185**
						0.121**
						0.259**

(注) **は $p < 0.01$, *は $p < 0.05$

有権者の党首態度に関する計量分析

相関係数が0.4を超えているのは、浜四津—不破(0.430)である。浜四津が党首を務める公明と不破が党首である共産党はともに堅い組織政党であり、両党は有権者からの拒否率も高い。ここでの、比較的高い相関は、堅固な組織政党を嫌う有権者が両党首とともに嫌う傾向があるためである。

相関係数が0.2~0.4の範囲にあるのは、菅—土井(0.361)、土井—不破(0.318)、菅—浜四津(0.278)、土井—浜四津(0.260)、不破—小沢(0.259)、菅—不破(0.239)の6組である。このうち、菅—土井、土井—不破、菅—浜四津については、それぞれが所属する政党間のイデオロギー的立場が近接していることが正の相関関係を示した要因であろう。ただ、小沢—不破に関してはイデオロギー的立場は全く異質であるが、強い改革派としての共通点があるのだろうか。概して、小沢を除いた野党の党首間には正の相関関係が見られるが、当時の首相であった橋本龍太郎は、他の党首との相関係数がほとんどない。このことから、橋本に対する好感度が他の党首から独立していることを示す。

以上、党首好感度の相関係数から個々の類似性を検討してきた。次に、党首に対する5段階の好感度得点を間隔尺度値とみなして因子分析を行い、党首好感度の全体構造の把握を試みた。その結果、2個の因子が抽出され、分散の説明率は52%だった。表5は、バリマックス回転後の6党首に関する因子負荷量を示す。

第1因子は(+) 不破・浜四津—小沢・土井・橋本—菅(-) となり、第2因子は(+) 菅・土井—浜四津・不破—小沢・橋本(-) となった。第1因子は、不破(共産党)、浜四津(公明)という比較的タイトな組織を持つ政党の党首が一方の極に位置し、他の極には菅(民主党)や橋本(自民党)という比較的緩やかな組織をもつ政党の党首が位置することから、組織型—個性型による分化と捉えることができる。また、後藤田正晴が述べたようなイデオロギー的凝集性の高い円形政党の党首とそれが緩やかな楕円形政党の

表5 党首好感度の因子分析（バリマックス回転後）

	1	2
橋本 好感度	0.200	0.027
菅 好感度	0.099	0.687
浜四津好感度	0.560	0.286
土井 好感度	0.281	0.473
不破 好感度	0.633	0.254
小沢 好感度	0.344	0.092

党首との分化とも捉えることができる⁽¹¹⁾。

第2因子は、橋本と菅が対極に位置し、土井が菅に次いで高い値を示す。また小沢が橋本に近い位置にあることから、保守派—市民派の軸とみなすことができる。菅は市民運動出身であり、土井も市民派のスタンスをとってきた。

先ほど、改革自己イメージと党首好感度との間の相関関係が弱いことを述べたが、この因子分析の結果においても、保守—革新の軸を見出すことはできなかった。したがって、党首好感度は有権者の改革自己イメージではほとんど説明できないといえる。

3-6 党首好感度と党首イメージ

各党首に対する好感度は、より具体的な党首イメージとどのような関係にあるのだろうか。本調査では、次の5項目を設定し、回答者には「そう思う」「どちらともいえない」「そうは思わない」の中から選択してもらった。5項目とは、「物事に前向きである」「信頼できる」「リーダーシップがある」「魅力がある」「人柄がよい」である。これらについての6党首の分布、平均値、標準偏差を表6に示す。以下、各党首に対する回答を検討する。

有権者の党首態度に関する計量分析

表6 党首イメージ

党首イメージ	そう思う	どちらとも いえない	そうは 思わない	平均値	標準偏差
橋本前向き	20.5	49.0	30.5	2.10	0.7078
橋本信頼	10.7	50.3	39.0	2.28	0.6461
橋本リーダー	18.1	45.9	36.0	2.18	0.7145
橋本魅力	19.0	48.5	32.5	2.14	0.7057
橋本人柄	29.9	49.7	20.4	1.90	0.7037
菅前向き	48.9	44.1	7.0	1.58	0.6197
菅信頼	33.3	55.1	11.6	1.78	0.6345
菅リーダー	28.7	59.9	11.4	1.83	0.6100
菅魅力	39.1	50.1	10.8	1.72	0.6476
菅人柄	37.9	53.6	8.5	1.71	0.6154
浜四津前向き	10.1	72.6	17.3	2.07	0.5192
浜四津信頼	7.8	69.2	23.1	2.15	0.5343
浜四津リーダー	7.3	67.2	25.5	2.18	0.5436
浜四津魅力	7.9	66.2	25.9	2.18	0.5536
浜四津人柄	11.3	72.3	16.3	2.05	0.5242
土井前向き	50.3	41.5	8.2	1.58	0.6394
土井信頼	34.8	51.2	14.0	1.79	0.6676
土井リーダー	54.4	36.7	8.9	1.54	0.6533
土井魅力	33.1	51.8	15.1	1.82	0.6716
土井人柄	26.9	56.5	16.6	1.90	0.6525
不破前向き	15.7	63.1	21.3	2.06	0.6057
不破信頼	7.4	64.4	28.2	2.21	0.5600
不破リーダー	14.9	63.7	21.4	2.07	0.6000
不破魅力	10.3	63.8	25.8	2.16	0.5818
不破人柄	7.2	70.3	22.5	2.15	0.5233
小沢前向き	24.7	51.5	23.8	1.99	0.6969
小沢信頼	11.4	49.5	39.2	2.28	0.6551
小沢リーダー	36.8	41.4	21.9	1.85	0.7520
小沢魅力	16.3	50.1	33.6	2.17	0.6854
小沢人柄	7.0	54.4	38.6	2.32	0.5977

(注) 平均値は「そう思う」1点、「どちらともいえない」2点、「そうは思わない」3点として算出。

橋本龍太郎

「人柄がよい」という項目以外は「そう思う」と回答した者よりも「そうは思わない」と回答した者の方が多い。なかでも、「信頼できる」の項目で「そうは思わない」とした者は「そう思う」と回答した者の4倍近くに上っており、平均値も2.3を示している。これは、参院選投票日直前になって、橋本首相（当時）がそれまでやらないといていた恒久減税をやるといい、選挙目当てと批判されたことも影響していると考えられる。標準偏差は概ね0.7を超えており、全体として他党の党首に比して回答の分散が大きい。これは首相という立場の存在感の大きさが影響していると考えられる。

菅 直人

まず、平均値で全ての項目で1台となっており、好感度の高さとともに、概ね良好なイメージをもたれている。とりわけ、「物事に前向きである」という項目については、半数近くの者が「そう思う」と回答している。

浜四津敏子

全体として、「どちらともいえない」と回答した者が多く、この回答からは浜四津の存在感の薄さが見てとれる。標準偏差も6党首中最も低い項目が多い。全ての項目で「そう思う」の比率よりも「そうは思わない」の比率が上回っており、浜四津イメージは全体として希薄である。

土井たか子

菅に次ぐ高い好感度を得ている土井は、概ね肯定的なイメージを抱かれている。中でも、「リーダーシップがある」という項目では54.4%が「そう思う」と回答しており、他の党首に比べ、断然高い値を示す。また、「物事に前向きである」とした者も6党首の中で最も多く、50.3%に上っている。土

有権者の党首態度に関する計量分析

井は有権者に強いリーダーとしてのイメージを抱かれている。

不破哲三

全体として、浜四津に類似したパターンを示す。これは有権者からの拒否度が高い共産党と公明の共通点が表れているのかもしれない。しかし、浜四津と違い長年にわたって共産党の指導的存在であった不破は、有権者に明確なイメージを抱かれていてもよいのではないだろうか。このような存在感の薄さは、近年共産党のニューリーダーとして志位書記局長の方にマスコミの注目が集まっていることも関係があろう。

小沢一郎

マスコミでは、小沢は良くも悪しくも「強いリーダーシップ」の持ち主として、伝えられることが多い。本調査においても、小沢イメージとして「リーダーシップがある」とした者が最も多い(36.8%)。けれども、そのパーセンテージは土井たか子(54.4%)を大きく下回る。「リーダーシップがある」という項目は標準偏差が0.752を示し、全ての項目の中で最高値を示している。

それでは、各党首の政党好感度はどのイメージ項目と相関が強いのだろうか。表7に各党首の好感度と党首イメージとの相関係数を示す。当然の事ながら、全項目で正の相関関係が見られるが、なかでも相関が高いのは、橋本—魅力(0.634)、菅—信頼(0.604)、菅—魅力(0.599)、である。各党別に見ると、何れも「信頼」と「魅力」が比較的高い相関を見せている。それに対して、「リーダーシップ」は比較的相関が低い。

さらに党首好感度を規定しているイメージ項目を検討するために重回帰分析を行った。結果を表8に示す。これを見ると、次のことがいえる。①どの党首においても、「リーダーシップがある」という項目は、好感度をほとん

表7 党首好感度と党首イメージとの相関係数

	前向き	信頼	リーダー	魅力	人柄
橋本	0.571	0.588	0.474	0.634	0.498
菅	0.460	0.604	0.391	0.599	0.481
浜四津	0.429	0.475	0.403	0.467	0.447
土井	0.521	0.571	0.427	0.536	0.465
不破	0.500	0.517	0.403	0.532	0.500
小沢	0.443	0.498	0.369	0.506	0.463

(注) 全て $p < 0.01$

表8 党首好感度を従属変数とした重回帰分析

	橋本	菅	浜四津	土井	不破	小沢
前向き	0.391	0.166	0.131	0.357	0.273	0.237
信頼	0.378	0.452	0.310	0.408	0.318	0.350
リーダーシップ	0.005	0.132	0.105	0.002	0.007	0.006
魅力	0.517	0.418	0.293	0.317	0.339	0.331
人柄	0.192	0.215	0.276	0.215	0.266	0.336
決定係数 (調整済み)	0.541	0.488	0.305	0.427	0.388	0.352

ど規定していない。②決定係数が比較的高いのは橋本と菅であり、浜四津が最も低い。③橋本は「魅力がある」が最も強く規定しているのに対して菅・浜四津・不破・小沢は、「信頼できる」と「魅力がある」がほぼ同等に好感度を規定している。土井は、「信頼できる」の次に「物事に前向きである」の規定力が高い。

全体としてみて、党首好感度規定する党首イメージは、「魅力」と「信頼」であり「リーダーシップ」は党首好感度の規定要因としては弱い。この分析結果からすると、ある党首が有権者の好感度を高めるためには、強いリーダーシップを前面に出すよりも、信頼性や人間的魅力をアピールしたほうがより効果的であるといえよう。

4. おわりに

本稿では、わが国の政治意識研究においては比較的手薄であった党首態度についていくつかの計量分析を試みた。分析の結果判明した諸事実のうちの主要なものをここで整理しておきたい。

第1に、首相に対する好感度は、内閣支持率と密接な関係にある。「首相は好きだが支持しない」あるいは「首相は嫌いだが支持する」という関係も想定されるが、今回の調査結果では、「嫌いだが支持する」という者はほとんど存在しなかった。

第2に、党首好感度と投票行動とはクロス集計結果では密接な関係にあるものの、ロジスティック回帰分析結果によれば、それらは疑似相関にすぎない。しかしながら、政党支持態度を従属変数とすると、党首好感度は強い規定力をもつ。

第3に、党首好感度と政治・生活意識との相関関係は総じて低く、とりわけ野党党首の場合に低い。また、保革自己イメージは党首好感度と相関が低い上に、党首好感度の因子分析結果においても保守—革新の軸は見出されない。したがって、有権者の党首好感度は保守—革新という従来の政治的対立軸ではほとんど説明できない。

第4に、党首好感度の因子分析結果によると、第1因子は組織型—個性型であり、第2因子は保守派—市民派の軸が見出された。

第5に、党首好感度を規定する党首イメージは、「魅力」と「信頼」であり、「リーダーシップがある」は党首好感度の規定要因としては弱い。この結果からする限り、党首の「強いリーダーシップ」は有権者の心を捉えにくいといえる。

もとより、今回の調査結果を分析して得られた知見は、直ちに一般化でき

るものではない。とはいえ、今まで比較的手薄であった党首イメージ・好感度に関して、いくつかの経験的仮説を提示しえた点で今後の調査研究の参考になったと考える。冒頭に述べたが、今日のように無党派層が増大し、メディア選挙が活発化すると、党の顔である党首に対する有権者のイメージが選挙に及ぼす影響力は無視できなくなっている。したがって、有権者の党首態度に関する分析がより一層多角的に行われる必要がある。

《注》

- (1) 三宅一郎『投票行動』東京大学出版会(1989年)73~74ページ。
- (2) 政党支持に関する質問のワーディングは、「あなたは現在、どの政党を支持していますか」である。
- (3) 読売新聞世論調査の結果によると、1998年6月調査における民主党支持率は5.5%だった。また、朝日新聞社が7月4日および5日に実施した選挙情勢調査における民主党支持率は7%だったのが同月13日と14日に実施した選挙直後の調査では16%に跳ね上がっている。『朝日新聞』1998年7月8日及び15日朝刊。
- (4) 1997年度調査の結果報告として、井田正道・林秉煥「1997年度政治意識調査報告」(常磐大学『人間科学』第15巻第2号、1998年)61~69ページ。
- (5) 原純輔「社会階層と政治意識」『1985年社会階層と社会移動全国調査報告第2巻階層意識の動態』1985年社会階層と社会移動全国調査委員会(1988年)、269~291ページ。
- (6) 三宅一郎『政党支持の分析』創文社(1985年)、4ページ。
- (7) 消極的支持層を含めて政党支持率としている朝日新聞世論調査データによると、石橋政嗣が委員長を務めていた1986年8月の社会党支持率が15ポイントだったのが、土井たか子が委員長に就任した後の同年10月には19ポイントに上昇し、いわゆる「土井効果」がみられた。
- (8) 時事世論調査データにより算出。時事通信社編『日本の政党と内閣』時事通信社(1992年)。
- (9) 日本経済新聞社が1998年6月に実施した全国世論調査によると、次期首相候補として、最も人気が高かったのが菅直人(25.3%)で2位の橋本龍太郎(14.7%)、3位の土井たか子(9.7%)を大きく離していた。一方で民主党支持率は10.0%にとどまり、自民党支持率36.8%を大きく下回っていた。『日本経

有権者の党首態度に関する計量分析

済新聞』1998年6月9日朝刊。

- (10) 三宅一郎は、1986年における中曽根イメージと投票行動、政党支持に関して次のように述べている。「中曽根イメージと当時絶好調であった自民党支持との関係はあまりに密接で、支持をコントロールすると自民党への投票に結びつかない（支持なし層でわずかながら自民党への投票を導いたにすぎない）。党首イメージは、とくに首相イメージは選挙になって初めて形成されるものではなく、選挙時には政党支持態度の一部に組み込みずみなのかもしれない。」三宅、『投票行動』、77～78ページ。
- (11) 後藤田正晴は、自民党を楕円形政党、共産党と公明党を円形政党と捉え、次のように述べた。「自由民主党は、図形に例えれば中心がいくつもある楕円形というか、もっと複雑な形をしており、中心が右、左あるいは真中に移行する（中略）共産党はマルクス・レーニン主義、公明党は日蓮正宗が中心の円形政党である。」後藤田正晴『政治とは何か』講談社（1988年）、46ページ。